

《Πίστις》の可能性の予備的一解釈学的作業

—Rm. 10:17をめざして—

雨 貝 行 磨

序

歴史的生命は、つねに現実的生における困窮 Not にあって、問われ、問いかえされることによって、歴史の端緒につく。すなわち問いかけとは現実的相対化である。この問いかけに対する否定媒介の情熱 Leidenschaft をもつことによって、生命は歴史を担いうる。すなわち、困窮 Not における方向づけを与えられる wenden ことによって生命は歴史的生命たりうる。

キリスト教信仰とは歴史的生命である。従って、それは、一義的に文化史における確定した価値観をもって証言されるものではない。人間実存による文化史的な自己完結的営みに対して問いかけることによって証言される。従って人間実存の決意性あるいは企投的投企に対しては厳密に中立するが、その決意性あるいは企投性が、むしろその根拠を絶対他者性において開放せられている時には、キリスト教信仰は共同しうる。むしろ、その概念性をを用いることによって、キリスト教神学は営まれる。その意味で、すべての学的営みに哲学は必要であるように、キリスト教神学の作業においてもそれは不可欠であるが、しかし、自己完結的、すなわち体系的哲学によっては、問いかけそのものを喪失するか、気づかずにいる。キリスト教信仰は、自己と他者の相対性の認識であり、この意味での認識は、他のすべての学的認識に参加しうるのである。

1. 哲学と神学—方法について

後期ハイデッガーによれば、哲学は《人間実

存 menschliche Existenz》において、《存在の真理 Wahrheit des Seins》を問う。《人間実存》とは、時間性・歴史性における先駆的決意性における現存在を意味し、《存在の真理》とは、学問的对象として解明されるものではなく、現存在の存在 Sein des Dasein において、開示され、明化されてくるものである。その意味で《存在》とは、自己開示するものである。ここにおいて、《実存》と《存在》とは、実存の地平において、存在の自己開示の場としての被投的企投 Geworfener Entwurf において究極的な関わりを示した。すなわち、被投的企投は、《語り》という応答的な聴従において示され、完成されるのである。そこで《存在の真理》から初めて、聖なるものの本質が思考される。聖なるものの本質から初めて、神性の本質が思考されねばならない。神性の光においてはじめて〔神〕なる語が何を意味すべきかが思考され、語られることが出来るのである¹⁾。

しかし、西欧形而上学の歴史においては、《神概念》は、存在から根拠づけられ、最高の存在者として、自己原因ないし第1原因 causa sui, causa prima²⁾ としての神概念であった。西欧形而上学の歴史において成立せしめられた神は、概念として、他の文化諸価値と等根的に存在するもの—存在者 Seiende として对象的・客観的なものであった。《〔神〕が全く〔最高の価値〕として告げられるなら、それは神の本質の格下げである》。価値づけにおける思考は《存在》に対してなされてはならない。価値づけられるところの《このような神に対して、人は祈ることも出来ないし、献身することも出来ない、自己原因の前で、人は畏敬から膝まづくことも出来ないし、またこの神の前で音楽を奏で、舞う

ことも出来ない³⁾。西欧形而上学との関連の中でいとなまれた神の問題を問う神学的作業は、共に、形而上学の運命にくみこまれていた。すなわち《神学は神の死において罪責をもつ。なぜなら、神学はなによりも、中世最盛期において、神を summum ens として理解したことによって、西欧の大きな神忘却を導びあげたのである⁴⁾》。神の存在の証明にみられる形而上学的思考と性格づけられる神学的作業の基本的性格は、神の即自存在を、世界内存在者の形而上学的即自存在と類比的にとりあつかい、実存への関与を遮蔽し、中性化しつつ、神に関する思考を局外的な距離におき、神の実存を排除したのである⁵⁾。

しかし、依然として、哲学と神学とは、必然的な緊張関係をもつ。すなわち、神学は、人間的現存在と世界の問題を宗教において問い、この《真理問題 Wahrheitfrage》の徹底性において、共通する連関がある⁶⁾。

哲学が問題とする《存在の真理》とは何か。《存在は、顕現する到来において、自己を、着来するものを眼前にあらしめることとして、すなわち、現われ、現出してくる多様なしかたの中での根拠づけること Gründen として示す。存在者そのもの、非秘匿性の中へと自らせまりつつ着来することは、根拠づけられたもの das Gegründete であり、それは根拠づけられたものとして、そしてかくして作り出されたものとして、それ自身の仕方⁷⁾で根拠づける gründen すなわち作用し、原因となる》。更に、《ただ単に存在が根拠として存在者を根拠づけるばかりでなく、存在者の方も、それなりに存在を根拠づけ、原因させる》。《かかることを存在者がなしうるのは、ただそれが、存在の充実で〔ある〕場合、すなわち、最高の存在者として〔ある〕かぎりにおいてである⁸⁾》。ここで存在を最高の存在者の面⁹⁾でみてゆこうとするとところに従来の神学は成立し、この最高存在者を神の概念とみたてたのである。従って、この《存在》は、我々が思考しているところの神ではない。すでにそれは、ハイデッガー自身も指摘している¹⁰⁾。け

れどもこの《存在》とは《歴史の空間そのもの、あらゆる生起の地平と総体¹⁰⁾》であり、この《存在》を思考する指示は《信仰の決断のない哲学》ではあるが、《人間の世界における事実的状况、つまり思考し哲学する人間の状況を端的に思考し、かくして、まさしく歴史的な世界における端的な歴史的人間存在の哲学として、すぐれた意味で、あらゆる歴史の能動者としての神に、自己を開くところの哲学¹¹⁾》である。そこで、神学とは、つねに途上にあるものとして¹²⁾、出会いにおける思考を経験することにおいて theologia viatorum を志向しているものである。さて、この人間の歴史的現実が、あらたに言葉にもたらされることこそ神が言葉に到来する時である。人間の言葉は存在の明化に到来し、そこにこそ、神の言葉が、その実存の将来への確言 Zusagen として約束されるのである¹³⁾。ここに終末論的希望が示されるのである。

存在の明化が言葉においてなされるように、神は、言葉の出来事においてあらわれる。

キリスト教神学は、キリストの出来事の宣教の理解を課題とする。宣教の課題は、宣教の理解の可能性という解釈学の問題に関わる。宣教の理解とは、聖書テキストの根源の真正な理解と、そこにおける説教 Verkündigung が、現代にとって理解されるかという理解可能性の問題からはなれることは出来ない。宣教内容は言葉の現実化において遂行される。

すでに、《現存在は言葉をもつ¹⁵⁾》そして、詩は、《人間が歴史的なものとして存在し得るための保証を与えるもの》としてあり、更に《人間の自由に処理し得る道具ではなく、人間存在の最高の可能性を左右するような出来事である¹⁶⁾》。転回 Kehre を経て、《言葉は存在の真理の家である¹⁷⁾》それゆえ《言葉は存在の家であり、そして人間の本質の住まいである¹⁸⁾》。《言葉は人間が地の上、天の下に世界を住む領域を開いて保つ¹⁹⁾》。更に《言葉は存在によって生じ存在から起こったところの存在の家である。それゆえに言葉の本質は存在への対応、応答

Entsprechung から、しかもこの対応、応答として、すなわち人間の住まいとして考えるべきである²⁰⁾。

かくして、《言葉》を語るとは、《存在》と《人間》との間にかげられた橋を構築することであり、対話の現成である。この場合、存在がさきにあつて、存在が人間に語りかけてはじめて、人間がそれに応答するのである。そこで、《語る》とは、存在が語りかける an-sprechen であり、《われわれが語ることは、それによってわれわれが語りかけられるものに 21) 22) 応答する ent-sprechen である》。語りかけるものは、存在であり、語りかけられるものは人間実存である。《人間は存在によってはなしかけられる。このことよつてのみ彼はその本質において現成する。この語りかけからのみ彼はその本質が住まうところを見いだし、この住まうことからのみ彼は住まいとしての言葉を持つ²³⁾》。人間は、存在の語りかけに対して ent- 耳を開き、聞き hören、その《語りかけに聴従する hören auf 24) ことよつて、応答に到達する》。

かくして、言葉は、存在への応答において人間の聴従を根拠づけるものとなる。この存在への応答に関わるものが哲学であり、人間の聴従を、神の言葉によるものとして理解する学が言葉の神学である。

この《応答》——《聴従》が哲学と神学とに対応し、また、従つて思考と信仰に対応することはいうまでもない。

2. 《語る》——応答としての

《聞く》ことは《キリストの言葉》からくる。すなわち、キリストの言葉が、語られるところで、聞くことができる。

《キリストの言葉》とは何か、また、その存在根拠から、いかなる《聞く》しかたがあるかを、求めてみる。

《キリストの言葉》とは、いうまでもなくキリストが語る言葉ではなく、キリストを語る言葉である²⁵⁾。この《キリストの言葉》は、宣教

Verkündigung の全過程から由来する言葉によつて明瞭である²⁶⁾。すなわち、原始教団は、イエスをキリストであると決断した。イエスが神の啓示の内容である。パウロは、この原始教団の決断の基礎に、自らの決断の根拠をおき、そこから、自己を新しく理解した。すなわち、イエス自身が、宣教する者 Verkündiger として自己を神の決定的な言葉の担い手として宣教したことが、原始教団において、十字架の出来事——終末論の自覚のもとで、すでに内在していた implicit であつたキリスト論を顕示 explicit にしたのである。原始教団においては、十字架は旧い人間の自己理解に対する神の否として理解され、ここにおいて新しい自己理解が成立する。自己理解とは自覚や自意識ではなく実存論を意味する。従つて、イエスは、パウロの実存によつて、宣教される者 Verkündigt としての宣教のキリストとして原始教団の実存を根拠づけ規定する。原始教団の実存は、聖書テキスト²⁷⁾において表現されている。かくして、聖書テキストへの接近は、一定の前理解を前提とし、無前提の釈義はありえないのである。

かくして、聖書テキストに定着したキリストの言葉は、史学的な出来事の報告の集積、あるいは過去に完結し、確定した出来事の記録ではなく、現在化しつつある人間に迫りくる出来事を示す。すなわち、キリストの言葉は、人間の本来的自己一決意性を示すのである。その意味で、キリストの言葉を、はじめて定着した原始教団と、人間の現存在とは、同じ生の構造連関にあることが《必要》である。しかも、この生の構造連関が、伝達として説明 erklären される事態において解消することが出来る事態、すなわち、伝達が、史学的確定の事実性である場合、事実性の認知において、たとえば三角形の内角の和に関する種類の、実存が関わらない知識の伝達であるなら、何か、連関は静的 static であり、緊張関係はない。けれども、伝達として説明されることに解消されず、何らかのかたちで、人間の自己理解——実存に関わる事態、たとえば、生・愛・信頼・真実・疎外・苦悩・虚

無・死といった事柄に関わる問題であるのなら、たとえ、あらわに、その人間の自己理解が問題になっていなくても、実は、実存そのものが問われている事態であるなら、実存論が《必要》である。しかし、この事態においては、実存論が《必要》ではあるが、それが問われているかぎり実存論では《十分》ではないのである。キリストの言葉には、かくして、実存論が必要ではあるが十分ではないのである。

キリストの言葉を語ることは、自己の存在を保証するしかたで、客観的・対象化において《語る》ことを意味してはならない。すなわち、キリスト自身を、西欧形而上学における概念適用によって把握しようとしてはならない。キリストを語る言葉は、キリストに関する知識として表現し、概念化してはならない。その時、キリストの言葉は説明されうる過去の出来事となり、報告・記録として完結し確定し、史学の対象となり、決して神学の内容とはならない。史学は神学的真理を証明しない。又史学的認識は、直ちには決して神学的意味をもたない。もし、史学が直接無媒介に神学に意味を与えることを保証するなら《史学と神学とは、それぞれ自律性が失われて、一方が他方に直接に依存し、また拘束される結果、逆に正面から対立してしまう。〔すなわち〕神学は特定の史学を要請し、史学は必ずしもこの要請には応えないのである。……歴史的事件と、その〔神学的〕意味とを直結させて、そこに介在したに違いない歴史解釈的な思惟を無視するなら、史学と神学とは、お互いに他方を従属させようとして抗争するほかはない》。キリストの言葉を語るとは、従って、史学の問題を否定媒介—解釈 aus-legen する神学的作業としての宣教である。釈義ではなく、この解釈による了解 Verstehen を志ざすのが、言葉の解釈学である。

キリストの言葉を語るとは、いかなるしかたで《十分》であるか。

われわれにとって、すなわち実存については、《語る》とは、個別的・限定的・特殊的な経験 Erfahrung を表現する ausdrucken ことで

ある。けれども、それでは、十分でない。語る《言葉は、その本質において表現でも、人間の行為でもない》²⁸⁾。むしろ《言葉が語る》²⁹⁾。《言葉は語る。それが語るのは、命ぜられたもの、物—世界と世界—物を、根底にあって相互に分つものうちへと到来すべく命ずることによってである》³⁰⁾。この根底にあって、神聖性なるものと、人間的なるものの安らかさの中へと導びかれる。それは事態をはじめて、その固有さのうちへと浮かびあがらせる。《安らかさの中へまもるとは、静寂にする stillen ことである》³¹⁾。《それは、物を世界の恵みの中へと安らかにさせることによって、静寂にする。それは世界をもの中へと満足させることによって静寂にする。根底にあって相互に分つものの2様の静寂にする中で、静寂が出来事として起こる Ereignis》³²⁾。《言葉は静寂のひびきとして語る》³³⁾。たしかに、人間は、キリストの言葉を語るときと、語るときの道具として、口腔・口唇・歯・咽喉・舌を用いる。その道具を用いて発音する³⁴⁾。発音は、音声学的・音響学的・生理学的なものとしてある。更に、キリストの言葉は、その有意義性 Bedeutsamkeit においてとらえられる場合もある。けれども、そのような時、人間は、あたかも、その言葉を形づくった者であり、たくみに事態を表現したようにふるまう。しかし、本来、言葉が語るなのであり、《人間は、彼が言葉の語りかけを聴従しながら言葉に応答するかぎりをはじめて、そしてその限りでのみ語るのである》³⁵⁾。この聴従 Gehör から、聴従として人間は語る³⁶⁾。従って《語るとは同時に聞くことである》³⁷⁾。《まずもってききとることである》³⁸⁾。《われわれが語ることは、われわれが語りかけられるものに応答する entsprechen ことである》³⁹⁾。

従って、《語る》ことにおいて、一定の実存の決意性にもとづく有意義性において、完成される事態ではなく、むしろ事態そのもの、すなわち、キリストの言葉そのものからの明化、すなわち、キリスト論が、終末論的救済史から、表現されることを意味する。キリストの言葉

は、ここにおいて、《十分》《語る》のである。

3. 《聞く》——聴従としての

《聞く》ことは、根源的にいかなる事態なのか。

《聞く》ことが生起する時、必ず一定の出来事が前提とされている。一定の出来事とは、何らかの意味で現在進行しつつある出来事と、既に確定し、完結した出来事とがある。たとえば、《物語り》を《聞く》とは、一応後者であるといえよう。しかし《物語り》が、事態として確定し、完結していても、《生々と語る》ことが出来るし、《生々と聞く》ことが出来る。この場合、確定し、完結していても、現在化するかたちで、受けとることをしているのである。また、なんらかの意味で、現在進行している出来事を、実存との関わりなしにいわば報告化し、過去化して《語る》ことも出来る⁴⁰⁾。従って《聞く》ということ何らかのかたちで、《現在化》すなわち《現在進行している》事態でしか受けとることが出来ないものにおいて思索の手がかりをもとめる。その手がかりを、《音楽活動そのもの》においてみる。

一般に、音楽活動が成立するための前提としては《音》があるという。《音は、一定の伝達速度のもとに、音源から環状に広がり、球状にもり上がって、媒介の中にうずまりながら、すみやかにわれわれの耳に達する。緊張した膜である鼓膜の振動は、内耳（鼓室・迷路）の中で神経の刺激にかえられ、音響信号として聴神経を伝って、聴覚をつかさどる脳中枢に達する。そこではじめて音がわれわれの意識にのぼり、そして音楽に変えられる……。だから人間の耳と脳なしに音楽はなく、それらが無い場合、音楽は揺れる物体の単なる振動にすぎないだろう⁴¹⁾》。多少ながくなったが、いとわず引用した。ここに、実は、音響学的・音声学的・生理学的・心理学的な学問的作業仮設の問題—科学的研究の方法論上の問題がひそんでいることと、今、われわれが課題としている《語る》→《聞

く》が必然的に、自動的に内容が伝達可能であるという短絡が、ここにもたんに示されているからである。

人間にとっては、《音》が発生し、それがたとえ、音響学的・音声学的・生理学的に、人間のいわゆる《い域》内であることが計数化されるかたちで確認されても、その発生した音を、必然的・自動的に、人間実存は《聞く》ことにはならない。

《音》について、音楽活動の側面からすこしくたち入ってみよう。従来、音楽活動が成立するための前提としては《楽》音が意味されねばならなかった。《音楽の基礎である原素材たる楽音は、一般的意味の音、もしくは騒音と言われるすべての不規則振動の中からごく一部を選択したものであって、規則的に連続する振動、従って、一定した音高をもち、そして、それは各単音（部分音）から合成された複合音である。かかる音は、不規則振動音の充満した自然界にあっては、ごく例外的で、また偶然に類似したものがある程度だから、音楽は主として、非現実的な、要するに人為的に生みだされた素材（媒材）によって行なわれると言わねばならない⁴²⁾》という自覚—自己制限を知っているのである。ここでは、客観的・对象的に、時間的に生成する音を、機械的・即自的に、分類されている楽音を、なぜ、人為的に選択され、生みだされねばならないのだろうか。その解答が、直接には、音楽美学—音楽的美意感あるいは美意識における音楽的探究となるだろう。しかし、従来、たとえば、E・ハンスリックに代表されるように、むしろ、音楽美学は、《楽音》が前提となっており、しかも、それは、非現実的な《快楽 Wohl laut》であり、音楽の本質はリズムである。リズムとは大きい意味ではシンメトリーを持った構築の各部分が統一整合されているという意味であり、小さい意味では一定の時間尺度内の個々の構成要素が合法的に交代する運動ということである⁴³⁾》ここでは、音の世界の自律的自己規定性と、楽音の固有な美を前提としている。この前提を指定する音楽活動の理解⁴⁴⁾

は、現実世界（歴史的現実）に関わる構想を喪失させ、そのしかたで、現実世界を矮少化し、人間の実存—主体的な営みによる—を忘却するのである。音楽現象とは、現実世界から、さまざまな手段と方法とをもって抽象化・観念化したことにおいて理解するのではなく、現実世界が生起し、それが我々にとって意味を問うものとして歴史化する事態、すなわち、自動車の疾走音・排気音・停車のきしみ、あるいは、人々の無関心をよそおいつつも関心せざるをえない沈黙と苦悩、喧騒なさけびに関わるしかたで、理解されねばならない。《音が音楽をつくるのではない、音楽が音をつくるのである》⁴⁵⁾。そこで、音楽活動を、音に関わる人々、作曲家であれ、演奏家であれ、あるいは聴衆であれ、彼個人の内的活動によって音楽的諸要素が既に、調整されたものとして完結し、確定していることを必要かつ十分なものとして考えてはならない。

もっとも、古典期・ロマン期においては、音楽家と聴衆とは、宮廷という狭いしかも固定した空間における主従関係であり、それは音楽を《聞く》者と、音楽を《語る》者とは、《語る》→《聞く》という、いわゆる伝達（報告）として直結し、音楽的にも調整の言葉については共通の理解、《聞く》ことの意味は報告伝達というかたちが自明のこととしてあったし、そのことによってしか、音楽家は、自己の個性においてのみ《聞く》ことで、生きるしかしなかったともいえる。そこでは《聞く》者は、本来的に、《語る》ことから疎外されて、情感的に感動するしかたで、発散させるか、あるいは機械的に、表出することで孤独な市民となったのである。かくして、ロマン期以後の近代市民社会においては《語る》者と《聞く》者とが二極分解し、《語る》者は《聞く》ことを、《聞く》者は《語る》ことを忘却するのである。《語る》者が真正に《語る》ていることは《聞く》者によって、《聞く》者が、真正に《聞いて》いるのは、《語る》者が、保証し、確実性を与えるのだが、そのようなしかたで、近代人が、自己

の確実性、保証するものを他者的な啓示からひきはなして、理性という自己完結的なものの自律性 Autonomie に自己の確実性をおくこととして理解した。ここに、《語る》ことが《聞く》ことを、《聞く》ことが《語る》ことを忘却した原因がみられる。

しかし、われわれは、本来的に《語る》ことが《聞く》ことであることを確認した時、調性を前提とし、音楽活動の基礎的素材として楽音を抽象することであってはならない。現代音楽の思想は既に、調性の崩壊を、即ち精神史的定位としてニーチエの《神は死んでしまっている》という現代的認識を自覚し、《近代小説にあらわれた有機的な人間像の崩壊に比較》⁴⁷⁾することを確認している。

もはや、音楽活動が、個々の音を、つねにトニックなものへ、全体的に有機的に方向づけ、収斂させるのではなく、個々の音を拘束し規定し、従って全体の音楽的素因を確定させているものから、ひきはなすことに他ならない。ここでは、個々の音は方向性を失うことにおいて、あらゆる方向をもつという自由をうるのである。かくして、音そのもの表現力の無限の可能性を追求しようとしなければならない。⁴⁸⁾

現実的世界が分裂し、対象的・客観的な世界像に信頼をもつことが出来ない時、抽象化が起こる (R.W. Worringer)。この時、抽象化とは、現実的世界の直接性の否定媒介を意味する。つまり、抽象化することによって、具体的現実的世界を、全的に課題としようとしたのである。

17世紀以来、《世界像の時代—世界像とは、世界についての一つの像を意味するのではなく、像としてとらえられた世界を意味する》⁴⁹⁾。これは《啓示による救いの確実性からの解放は人間が真理を自分自身の知識によって知られたものとして確保するという確実性へと解放する》⁵⁰⁾。人間の確実性の根拠を与えていた《神は死んでしまっている》《客観精神は崩壊》した時、《理性》はその運命を自覚させられたのである。すなわち、《人間の理性は、ある種の認

識については特殊な運命を担っている。すなわち、理性がさけることも出来ず、さりとてまた答えることが出来ないような問題に苦悩するという運命である。さけることが出来ないというのは、これらの問題が、理性の自然的本性によって理性に課せられているからである、また答えることが出来ないというのは、かかる問題が、人間理性の一切の能力を越えているからである》。(I. Kant 純粋理性批判・序)

《客観精神の崩壊》と共に始まる《人間の確実性》の危機は、音の世界において A. Schönberg は苦悩として表現した。オラトリオ《ヤコブの梯子 Die Jokobsleiter》1913年(未完)である。そこでとりあげられた問題意識の展開は、一定の条件と状況の中で人間の苦悩として表現される。《それは〔約束の地〕をもとめて苦悩し遍歴するユダヤ民族の永遠の希望》と《モーゼとアロンという2人の指導者の思想的対立》の中で展開される。現実世界において、《〔約束の地〕を信じえぬアロンは、神に対する民衆の不信と背徳をあがなうために死ななくてはならないし、〔約束の地〕を信ずるモーゼには、苦難のすえにそれをかいまみることを許されるであろう》⁵¹⁾しかたで終末論的希望が証言される。

音楽活動において示されるように、現実世界における音楽する者の行為、実存達成が、《楽音》のみを選択することではなく、静寂 Silence⁵³⁾をもふくめた全音域に拡大されて、その前提をもつのは、実は、《音》そのものの世界からの《語り》かけがあり、そこでこそ《聞く》ことがなされるからである。《音》の世界の根源的な《語り》かけがあることによって、《聞かれ》うる。

《音》の語りかけは、歴史的現実を、対象的に選択された領域に限定することは出来ない。《調性》を超越した《音》全体の世界に因わる。この全体的な歴史的現実、実存にとっては、失敗と挫折のくりかえしとしてみられる。しかし、それを規定するがわからみれば依然として、キリストの出来事、救済史である。⁵⁴⁾

神は、歴史のなかで行為する一つねに到来し、出会う神 ever-coming, ever-encountering Godである。神は、コスモスを形成し、理性によって認識することの出来る調和せる形なす精神の法則として考えられるのではない。しかも、神は言葉として出会うのである。神が神として人間に対して行動することは、まさに神の言葉においてであり、言葉と共に、なのである。《神の行動のしかたは、神が語ることである》⁵⁵⁾。神が人間に向かい、人間に語りかけることは、神の人間性に属する。人間に向けられた神の言葉—神の語りかけ—神の行動は、そのまま人間的な言葉なのである。すなわち、神が言葉に到来することが神の人間性の啓示である。かくして、この言葉は、語られるままに、それを受け、その言葉に信頼することを期待するのである。人間は、神の約束にある未来をひらく実存達成として、この言葉に依存するのである。神の言葉は、歴史の中へ入りこみ、歴史的現実となるのである。《神は言葉として出会うのである》⁵⁶⁾。ここにキリストの言葉が生起する。

史学は、かくして、そこで生起した出来事が、行為であることを知らねばならない。更に、その行為者の思想の認識に開放されていなければならない。すなわち史学は解釈学の位置を保留しなければならない。歴史研究は、科学者が、自然的現象を知覚するように思想を知覚することではなく、思想の経過を繰りかえすことによってそれを了解するのである。かくして《歴史の経過は、思想の経過として精神の生であり、したがってまた歴史認識は同時に自己認識である》⁵⁷⁾。この自己認識とは、自己完結的な内省、そのいみでの自覚を意味するのではなく、人間がその実存の可能性に向かって理解関係を措定する解釈学的な構造を意味するのである。

しかし、思想の経過を、直接無媒介に了解することは出来ない。むしろ《過去》の思想を、再び思考することが、再一思考の自律的な批判的行為である》⁵⁸⁾。自律的な批判行為は、過去の思想—すなわち、精神的生の《持統的に定着し

た》テキストに向けられる。このテキストに対する志向的接近は、人間実存の一定の設問によって Woraufhin なされる。そこに、いわゆる前理解 Vorverständnis がある。

そこで、《聞く》ことにもどると、《なるほど、われわれは、Bach のひとつの Fuga を耳を通じて durch die Ohren [聞く]、だがその場合、それはただ音波として鼓膜をたたくところの聞かれたもの das Gehörte にとどまるならば、われわれは Bach の Fuga を決して聞くことはないだろう。われわれが聞くのであって、耳が聞くのではない。この場合、〔もって mit〕が耳が感覚器官として聞かれたものをわれわれに媒介するものであるということの意味するならば、それゆえ人間の耳が鈍感 Stumpf に、すなわち Taub になる場合、それにもかかわらず、人間は Beethoven の場合が示すように、なお聞き、おそらく従来より、より多くのそしてより大きなものを聞くということはある⁶¹⁾》。

かくして《聞く》ということは、耳が音響学的・解剖学的・生理学的な感覚器として作動するということによって、ただちに、生起するものではない。つまり《聞く》とは、《解剖学的に確定されなければ、また生理学的に証明されもしないし、一般に生物学的に、有機体の内部を経過する一つの過程としても把握されない⁶²⁾》。

人間が《聞く》ということは、騒音を聞くのでも、ましてや《純音》《楽音》を《聞く》でもない。そこに端的に生起する音既ち空に充滿する音、モーターの音、自動車のブレーキ、北風の音、そして都市の喧騒を《聞く》のであって、むしろ純粋な《楽音》や《騒音》を聞くことはないのである。

ま と め

ἄρα ἢ πίστις ἐξ ἀκοῆς,
ἢ δὲ ἀκοὴ διὰ ῥήματος
Χριστοῦ Rm. 10 : 17

1. πίστις ἐξ ἀκοῆς⁶³⁾

πίστις は、自己完結的作業ではなく、むしろ、《語りかけ》の言葉に開放されるなかで聴従を完成すること。そこでは《自己》すなわち、実存状況、その歴史的現実における決意性にある有意義性あるいは志向性 Woraufhin は《必要》であるが《十分》ではなく、事態そのものに対して《自己開放》⁶⁴⁾することを示すことにおいて《十分》である。πίστις はその根拠と起源を自己を超越した事態におく。πίστις は一度聞くことによって保持される確定した知識ではない。

2. ἀκοὴ διὰ ῥήματος Χριστοῦ

ἀκοὴ が《自己開放》していること地平においては、ῥήμα Χριστοῦ が、《十分》な意味をもつ。すなわち、ἀκοὴ による他者への自己開放においてはじめて Πίστις は《必要》かつ《十分》な条件をそなえる。

註

- 1) M. Heidegger: Über den Humanismus 1949 S. 34.
- 2) Derselb: Identität und Differenz 1957 S. 70.
- 3) imd: S. 70.
- 4) H. R. Müller-Schwefe: Existenzphilosophie 1961 S. 69.
- 5) G. Ebeling: Zwischen Gott und Gott Z. th. u k 62, 1965 S. 105.
- 6) H. Ott: Denken und Sein. Der Weg Martin Heideggers und der Weg der Theologie 1959 S. 16.
- 7) M. Heidegger: Identität und Differenz 1957 S. 66 f.
- 8) ibid: S. 67.
- 9) Derselb: Über den Humanismus 1949 S. 19 f.
- 10) H. Ott: Denken und Sein S. 153.
- 11) ibid S. 157.
- 12) ibid S. 174.
- 13) G. Ebeling: Das Wesen der christlichen Glaubens S. 255.
- 14) ibid S. 252.
- 15) M. Heidegger: Sein und zeit 1927 S. 165.
- 16) M. Heidegger: Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung 1951 S. 35.
- 17) Derselb: Über den Humanismus 1949 S. 9.
- 18) ibid: S. 45.
- 19) Derselb: Hebel-Der Hausfreund 1957 S. 38.

- 20) *ibid*: S. 21.
- 21) *ent-sprechen* は *antworten* としての *erwidernde Aussage* ではなく、むしろ *ent-* 対応して語ることを意味する。M. Heidegger: *Was ist das—die Philosophie?* 1956 S. 34.
- 22) M. Heidegger: *Was ist das—die Philosophie?* 1956 S. 32.
- 23) Derselb: *Über den Humanismus* 1949 S. 13.
- 24) Derselb: *Wes ist das—die Philosophie?* S. 34.
- 25) 松木治三郎: *ローマ人への手紙—翻訳と解釈—* 1966, 394頁。
- 26) D. Michel: *Der Brief an die Römer* 1963 S. 262.
- 27) R. Bultmann: *Die Bedeutung des geochichtlichen Jesus für die Theologie des Paulus* 1929 in *Glauben und Vestehen I* SS. 188-213. 及び Derselb: *Das Verhältnis der urchristlichen Chstistusbotschaft zum historischen Jesus* 1960 in *Exegetica* に主によった。
- 28) M. Heidegger: *Unterwegs zur Sprache* 1959 S. 19.
- 29) *ibid*: S. 19.
- 30) *ibid*: S. 28.
- 31) Derselb: *Vorträge und Aufsätze* 1954 S. 150, S. 177.
- 32) Derselb: *Unterwegs zur Sprache* S. 29.
- 33) *ibid*: S. 29.
- 34) *ibid*: S. 30.
- 35) Derselb: *Hebel—Der Dausfreund* 1957 S. 35.
- 36) Derselb: *Über den Humanismus* 1949 S. 45.
- 37) Derselb: *Vorträge und Aufsätze* 1954 S. 190. vgl. Derselb *Satz vom Grund* 1957 S. 161. Derselb: *Hebel—Der Hausfreund* 1957 S. 34.
- 38) Derselb: *Unterwegs zur Sprache* 1959 S. 2.
- 39) *ibid*: S. 254.
- 40) *ibid*: S. 32.
- 41) このことは《語る》に関しても全く同様に言える。
- 42) H. J. モーザー: *音楽美学*, 1966, 2版, 邦訳, 20頁。
- 43) *ibid* 21頁。
- 44) E. ハンスリック: *音楽美学*, 1894, 邦訳, 75頁。
- 45) 村上嘉隆: *音楽美学*, 1965, 50頁以下, 特に19—31頁。
- 46) A. Wellek: *Musikpsychologie und Musikästhetik* 1963 S. 144.
- 47) 《個性ということはこの場合、人間の存在を保証するものとしての個性》遠山一行: *現代音楽試論*, 思想, 1968, 10月号, 8頁。
- 48) *ibid* 5頁。
- 49) たとえば C. A. Debussy は、現代無調性音楽への端緒的な試み。
- 50) M. Heidegger: *Holzweg* 1952² S. 82.
- 51) *ibid*: S. 99.
- 52) 1932—1951, 彼の死によって中絶のままのこされたものであるが、この時代思潮を M. Heidegger のいわゆる転回《Kehre》の問題、すなわち、西欧形而上学の終えんとあわせて考えてみたい。
- 53) 北沢方邦: *現代作曲家論*, 1968, 21頁。
- 54) J. Cage: *Silence* 1961 を思いおこしたい。
- 55) 音楽的空間における調性・無調性の止揚が神学的課題としての、聖俗元論の止揚としての世俗化 *Säkularisierung* の問題と類比されて示唆される。
- 56) R. Bultmann: *History and Eschatology* 1958² p. 96.
- 57) G. Ebeling: *Das Wesen des christlichen Glaubens* 1959 S. 113.
- 58) *ibid*: S. 115 f.
- 59) *ibid*: S. 101.
- 60) R. Bultmann: *History and Eschatology* 1958² p. 131.
- 61) *ibid*: p. 131.
- 62) M. Heidegger: *Der Satz vom Grund* 1957 S. 87.
- 63) *πίστις* をただちに、概念規定を検討することなく《信仰》と翻訳することを検討する解釈学的作業のため、方法的に内容をあらかじめ示すため、翻訳せずに保留する。
- 64) *ἐξ ἀκοῆς*, が注意されて翻訳されねばならないが, *faith cometh by hearing* (AV), *faith comes from hearing what is told* (Gspd), *from a message heard* (Mon), *from what is heard* (RSV) と *hear* がのこされているが、NEB では *We conclude that faith is awakened by the message* として *ἀκοή* についてはかなり無神経に翻訳されて *hear* が消去された。Luther は *So kommt der Glaube aus der Predigt, das Predigen aber durch das Wort Gottes* と訳している。しかし《Diese Übersetzung wird dem Wort *ἀκοή* nicht gerecht, dessen sich Paulus hier bedient. Es bedeutet: Gerücht, das gehört wird (Th WNT I S 222f Kittel), als eine Rede, die an den Hörer gerichtet und von ihm empfangen wird. Dann meint Pls. als, daß der Glaube von dem Reden herrührt, das einer hört, dieses Reden aber durch Christi Wort entsteht u, von ihm herkommt. So werden in diesem Ausspruch also Chrisdi Wort, die Predigt u. der Hörer, der zum Glauben kommt, zusammen-geochlossen zu einer Einheit. Müller-Schwefe: *Die Sprache*

u. Das Wort 1961 S. 242 f. cf. ἡ εἰς ἀκοῆς
πίστεως Gal. 3:2 ただし Rm. 10:16において、
τῇ ἀκοῇ ἡμῶνを who hath believed *our report*
(RSV), who has put faith in *what we told*
(Wms), who has believed *our teaching* (TCNT)
our message (Wey), *what we have told* (Gspd),
wer glaubt unserm Predigt (Luther) と訳し
《ἀκοῇ》を生かしていない翻訳が多い。この文脈
においては《ἀκοῇ》は重要であることを注意しな
ければならないことを A. Schlatter は指摘して
いる (Gottes Gerechtigkeit 1959⁹ S. 316 f) 聖

書協会訳では《聞いた》となっている。なおイス
ラエルにおいては、(St-Bw IV S. 283) ἀκοῇ はラ
ビの sh^omū'ah しらせ、おとずれ、特別には伝統
的教え Lehrer であるが、新約では、宣教一教い
の使信である。(O. Michel: Der Brief an die
Römer 1963¹² S. 262) なお εἰς については Pls.
においては *dia* と注意されて für die direkte
Ursache, die ihre Wirkung aus sich hervorgehen
läßt (A. Schlatter: Glaube im Neuen Testament
1963 S. 611) としている。